

*** 紹 介 ***

川 島 眞 人 著

『水滴は岩をも穿つ』

今年（平成一八年）の医史学会総会は大分県中津市で開催された。この地が前野良澤から福沢諭吉に至るまでの、蘭学の里であることは夙に有名で、今では医史学徒のみならず、多くの人が知るところである。総会を主宰された川島真人会長が、郷里中津市の蘭学研究を精力的に推進され、多くの論文、著書、講演で啓蒙されている活動は瞠目すべきものがある。

今回、さらに新しく「水滴は岩をも穿つ」を出版された。中津の蘭学にまつわる文章と関連の事項が網羅されている。本書は五章から成り立っている。

第一章は「中津をめぐる蘭学者たち」である。中津出身ではないが、関連学者として大槻玄澤、緒方洪庵などを述べて、次に「右田力太郎による富永章一郎の解剖」がある。人体解剖の歴史に触れたのちに、中津市の豪商十四代目の富永章一郎の解剖が、中津の医師で著者の親戚でもある右田力太郎によって、明治二年に行われた史実の紹介である。この記念碑もあるという。解剖時の助手に、田原 淳の養父田原春塘がいるのも興味深い。あまり知られていない事実である。二宮敬作の評伝は、シーボルトとの関連から、詳細に記述され参考になる。

そのほか、種痘と香月牛山（中津）も紹介されている。辛島正庵の中津における種痘との関いは、長崎の蘭学に学んだことが発端で、のちに医学館、医学学校へと発展する基礎にもなっている。

中津医学学校の校長であった、大江雲澤の業績も興味深い。現在は実家が大江医家資料館として公開されており、華岡青洲との関連を含め貴重なものが集められ展示されている。また、資料館の裏庭は、葉草園としても利用されている。この資料館の整備については、著者の努力に負うことが大きい。第二章は「中津をめぐる人々」である。

ここには中津市の医師村上田長の子息、村上功児の業績が、大きく取り上げられている。功児は医師ではないが、実業家として才能を発揮し、中津市および北九州市で文化活動を行い、教育事業にも熱心な人であった。著者は文化的基盤を作った人として尊敬の念を捧げている。

功児の父、田長についても記し、地域の医療、道路事業への寄与などを付記している。

オランダ正月料理の文章も新鮮である。長崎出島で正月に食べていた、料理のレシピを見て復元している。味は最初は不評であったらしいが、日本人好みの味付けにしたという。評者も一度提供され味わったが、やはり美味とは言いかねた。

われわれ整形外科医にとって忘れてはならない、田代基徳についても詳述されている。ご承知のようにわが国における最初の整形外科学講座は、東大の田代義徳により開講されたが、基徳は義徳の養父に当たる。基徳の実父が中津出身の松

川北渚である。

心臓の刺激伝導系の発見者田原 淳も中津と関係が深い。彼の養父田原春塘は中津で開業していた医師である。淳は中津近郊に生まれ、九大卒業後ドイツのアシヨッフのもとで、この偉大な発見をしたのはよく知られたことである。

第三章は「整形外科と蘭学」である。

中津市の村上医家史料館には、日本最初の人骨図「人身連骨眞形図」が展示されている。これは京都の眼科医根来東叔が写生したものであるが、その価値、中津で展示に至る経過について述べている。

中津藩三代目藩主奥平昌鹿(一七四四―一七八〇)の母の脛骨骨折が、長崎の吉雄耕牛の治療で完治したため、蘭学に大変興味をもったとのエピソードが紹介されている。

前述の吉雄耕牛塾では、整骨術が必須科目となっていたために、耕牛門下が全国に広がったという。

前野良澤の弟子である大槻玄澤も整骨術には大きな関心を示し、治療に当たった十三か条の注意事項は今でも通用する。

華岡青洲の蘭学由来の整骨術、加古良玄の「折肱要訣」、木骨を製作した星野良悦、各務文献、奥田直行などについて詳細な紹介があり、この方面の研究には大変役立つに違いない。

一六〇〇年大分県臼杵沖に漂着した、リーフデ号と三浦安針のことも、蘭学の曙として詳述されている。

第四章は「つれづれなるままに「灯」という題である。

「灯」とは大分合同新聞のコラム欄の名(ここは第三章までの、

中津における蘭学の系譜と偉人列伝の要約といつてよい章である。

第五章は「神から与えられたメス」に寄せて「である。これはわが国で最初に心臓移植術を行った、札幌医科大学和田寿郎教授へのオマージュが述べられている。毀誉褒貶多数の中で、直接の交流を通じて著者は、和田のパイオニア精神と人格を絶賛している。

顧みれば中津藩主奥平昌鹿は、自らもオランダ語を学び、オランダ料理を食べ、わが国で最初の和蘭辞書「蘭語訳撰」(一八一〇)、三番目の蘭和辞書「中津バスタード辞書」(一八二二)を出版するほどの、蘭癖大名であった。このことが今日の中津市が蘭学の里として、発展に繋がっていることを忘れてはならない。

以上が本書の梗概であるが、全編郷里中津市への愛情に満ち、蘭学の里の発掘から得た資料の研究を基にした、革新的な考えも述べられている。これまでの著者の集大成と考えて差し支えない。それにも増して医療、医政に超多忙な著者が、これだけ豊富な史料を基にして、多くの流麗な且つ正確な文章を書き続ける能力には脱帽せざるを得ない。

本書を蘭学の解説書としてのみならず、一般教養書として江湖の人々に推薦する次第である。

(小林 晶)

〔梓書院、福岡市博多区上呉服町五一三〇、電話〇九二二二七一一五二八八、二〇〇六年五月、三六二頁〕